FMOCA コレクション展
言語　–コトバ–

言語は、20 万年に及ぶヒト科新人（ホモ・サピエンス・サピエンス）の歴史の中で創造された、ヒト固有の能力です。脳と心の進化にともない、人間は言語を多種多様な伝達道具へと発展させてきました。ホモ・サピエンス（知恵のある人）である人間の言語は、他者とのコミュニケーションや複雑な事象の記述と記録を可能にし、生態的・文化的に適した伝達手段となり、使用する集団の認識ツールとしての役割を担ってきました。伝達できる範囲に限りのある動物の言語とは異なり、コトバを無限に創造できるのは、人間の言語における最大の特徴です。FMOCA では今回、「言語-コトバ-」をテーマに FMOCA コレクション展を開催します。

人間の言語の発生やその多様性に関しては、デカルト（Rene Descartes、1596-1650）以降、様々な議論が行われてきました。デカルトが提起した第一の論点は「心身問題」であり、その解決は「コギト」、人間の理性の存在でした。その後、ソシュール（Ferdinand de Saussure、1857-1913）、チョムスキー（Avram Noam Chomsky、1928-）によって、人間とその知性の進化の問題とが結び付けられます。ソシュールが「言語能力の有無が、人間と動物の差異である」と考えたように、言語の習得は、今日までの人間と心の進化ともいえます。先史の人類が壁画を描いた行為は、文字が発生した後も、目印や符号、文様という多様な形式で私達の伝達手段の一つとして存在し続けています。物語の挿絵や地図の記号、建築の文様は、伝えようとすることを時に感覚的に、時に論理的に伝えるための道具となります。「美術」という世界においても、言語と作品の間には多様な相互関係が育まれてきました。それ自体が作品の主題とも媒体ともなることで、美術における言語の意義は測り知れません。また、体感した作品をその場にいない他者と共有するために、言語が必ず必要とされると同時に、非言語的コミュニケーションによるコトバを超越した感動の共有という感覚に根ざした価値観が正しいと言えるのも、その多角的関係を示唆する側面でしょう。本展で紹介する「Counter me on」（2003）は、ネオンライトの数字で構成された作品です。宮島達男（1957-）は、「数字」という世界における共通言語を通して、時間や人間のライフサイクルの連続性、永続性、関係性を表現してきました。数字という言語を作品のツールとして使用することで、宮島氏は、「それは変化し続ける」、「それはあらゆるものと関係を結ぶ」、「それは永遠に続く」という作品コンセプトを具現化しています。また、草間彌生（1927-）は、作品制作と並行して多くの書籍や詩を作り上げてきました。言語を媒体とした作品群から、私達は、草間氏が描く世界とメッセージをより強く感じ、より深く知ることができます。このように、言語は作品、作家と鑑賞者を結ぶ役割をも担っています。

私達は日常を超える体験について、科学や哲学、宗教の力を借り思考し、認識を得ることができます。作品を読み解く行為は、諸分野の書籍を読むことと同じように、知恵を獲得することにつながります。そして、美術は時にその認識の限界をも超える新しい世界を私達に提示します。本展と通して、認識の制限を超える手段ともなりうる美術と言語（コトバ）の関係について考える機会となれば幸いです。

2009 年 7 月 11 日
フォーエバー現代美術館
チーフキュレーター　加藤　淳